

◆ 書 評 ◆

十名直喜著『ひと・まち・ものづくりの経済学
—現代産業論の新地平』法律文化社

藪 谷 あや子 (人間環境大学)

1. はじめに

今日、日本の製造業企業の世界シェアにおける急落のもと、日本のものづくりの特徴と底力を見直そうとする機運が高まっている。匠の技への高い関心もその一つの表れと思われる。他方で、新ものづくり（新事業分野への応用型ものづくり）、超^{スーパー}ものづくり（最先端的ものづくり）、脱ものづくり（コト・価値づくり、ブランド化）等々、ものづくりの高付加価値化のための方向性について多くの議論がある。そうした議論を抱えこみながら、グローバル化とIT化、モジュール化の進展に伴う競争力基盤の変化に照応し、地域の栄枯盛衰が激しくなっている。

本書は、ものづくりを、農業・工業・サービス業にまたがる広義の視点から捉え直し、日本の「型」という「わざ」継承の文化を手がかりに、日本のものづくりの特徴、個性を再確認するところから出発し、まちづくり、ひとづくりへと視野を広げ、伝統と近代がからみあうダイナミクスを通して、社会・技術・文化を日本特有の一つのシステムとして融合する「ひと・まち・ものづくりのシステム・イノベーション」をめざす「人間発達の視点と現場に根ざした、日本初にして現場発のオリジナルなものづくり経済学の書」（まえがき）である。

本書は、著者のそれまでの業績を集大成した個人研究史上の記念碑的著作であるが、それにとどまらず、新たな理論体系を構築しようとする挑戦の書でもある。本書は、「働きつつ学ぶ」ことで見えてくる、あるいは、そこでしか見えてこない、独自の地平を示そうとする著者の誇りと気概と気迫がうかがえる。

著者は、「ものづくり」、「まちづくり」を次のように定義している。「まちづくりとは、まち（地域）が抱える諸課題に向き合い、ハード・ソフトの両面からアプローチし解決を図ろうとするプロセス、である。まちづくりは、地域づくり、地域創造とも呼ばれるが、暮らしを支える産業振興はそのコアに位置づけられる。その際、ものづくりは、生活密着型の地場産業・中小企業のみならずグローバル産業・大企業においても、地域とのかかわり（まちづくり）を抜きに展開することはできない。」(p107)

「ひとづくり」については明示的には述べられていないが、資本主義化、工業化がもたらす専門化、細分化による人間疎外から人間性を回復する、さらに人間の全面発達を求めていく「学び」のこころの社会的条件の整備と解してよいように思う。それを、「働く」「学ぶ」「研究する」を融合させた日常的な生の「型」を社会人大学（院）の可能性と潜在能力の豊かさに見出すところに、本書の「ひとづくり」の独自性がある。

そして、「ひと・まち・ものづくりのシステム・イノベーション」、即ち、三位一体の地域づくりの事例として、流域、街道、沿岸を軸にした、地域の人々の広域連携の取り組みを通して、そこが一つの文化圏、産業空間、交流圏である（あった）こと、日本が「森と海の環境国家」であることを（再）発見し、農業と工業、サービス業の高次な総合を提唱する「環境文化革命」という展望を示す。歴史、文化、資源、景観等々の地域の固有性と、それらの潜在能力をひきだすものづくりとを結合させる経済学（文化経済学）と、有限な地球観を前提にした経済学（環境経済学）を視野にいれた価値づくりをめざす新しい経済

学の提示である。

本書は、「森と海の世界国家」という日本固有の展望を別にすれば、以下の点で、産業クラスター論、創造都市論と多くの共通点をもっている。地域の固有性と潜在能力の再発見、イノベーション、環境文化、価値創造を追求するものづくり、自治的で創発的な起業家ネットワーク、技術進化的コミュニティや創造都市の形成、総じて、産業再生あるいは新産業創出と一体化させた都市・地域再生論という枠組みと、そこにおけるビジョナリーや住民リーダーの役割の重視である。そのなかで他と一線を画する本書の特徴は、〈技術・技能・労働〉と〈人間(発達)〉との相互・相乗関係を中心に据えた点であり、それが「現場発」理論の真骨頂でもある。

本書では、方法論的には二つの軸がたてられている。一つの軸は、型・システムという構造論的な問題把握である。今日の日本が抱える産業・地域・労働の諸課題をのりこえるには、個別の「つくり」では限界があり、三つの分野を三位一体的にシステムとしてとらえ、システム自体を、環境と文化という価値の創造に向けて組み替えていくイノベーションによって可能になるとする。イノベーションという概念は一般的には「革新」の訳語により、画期的な発明や製品開発に用いられるが、原義の一つである「新結合」(三つの「つくり」の融合)による「新分野」(本書では環境文化革命)の開拓と解すれば、本書の意図にそえよう。

今一つの軸は、資本論研究をふまえた危機のメカニズムと変革の展望を探る発展論的な論理展開である。それは、著者の経歴とその実践知に深く関わっている。即ち、人間の本性、生の営為の意味を、「学ぶ喜びとものをつくる喜び」を通して、人間として全面発達すること、欲求水準を向上させ、全面開化することにみる。そこから、これを阻害、抑圧する経済・社会・政治的諸力と、それをのりこえ人間性を回復しようとする働く人々との鋭い対抗関係を、生産と生活、職場と地域において深部(現場)から描き出し、そこから、人間発達の条件、契機、展望を、経済史のプ

ロセスをふまえて解明することを追求する。この立脚点は、経済学基礎理論研究所が集団研究として明らかにしているところであり¹⁾、著者は同所の創設以来の中心的メンバーの一人でもある。

2 本書の構成と主旨

序章 現代産業論の新地平—ひと・まち・ものづくりの三位一体アプローチ—

序章では、著者の経歴と4冊の著作(日本型企業社会論、鉄鋼産業論、地場産地革新論)の紹介がなされている。本書に盛られた著者の意図をより深く理解するうえで不可欠の理論的基盤を提供するものとして、あらためて評者の視点で紹介したい。

著者は、20～40歳代は、鉄鋼産業を軸に大工業型産業システムの研究に力を注いできた。日本型企業社会論では、当時、絶頂期であった日本のものづくりの秘訣とされた日本の経営絶賛論をうけてのヒューマンウエア論や人本資本主義論を批判的に摂取しつつ、前近代性の残滓を残す日本の経営システムを、日本社会のトランスフォーメーションとして、「日本型」経営として把握し、その欺瞞性を詳細に描いた。インフォーマルな権力の行使による高密度かつ長時間労働、それらへの社会的規制の弱さ等々、今日もその精彩は少しも損なわれていない。

鉄鋼産業論では、「鉄は国家なり」に替わる新たな主役産業の足音を聞きながら、日本鉄鋼産業が構造転換期を迎えていることを、鉄鋼技術と生産工程の革新および鉄鋼労働者の意識の変化を跡づけることで実証した。中村静治、中岡哲郎、竹谷三男氏らの技術論等を深く学んだ理論的素養と、現場からの考察が結合した重厚な研究である。

鉄鋼マンから大学教員に転じ50～60歳代になると、生活密着型地域・産業システム研究へとシフトし、近年では、さらに調査対象を農林水産業地域や九州に広げ、地域産業と地域再生を一体化させた事例を豊富化することで理論の体系化に取り組んでいる。本書はその集大成の書でもある。

**第1部 ものづくりとひとづくり
—技術と現場のダイナミズム—**

- 第1章 ものづくりと技術・技能
- 第2章 現場重視のものづくりと経営戦略—東国製鋼モデルにみる経営革新と日韓比較の視点
- 第3章 伝統産業のハイテク化と熟練技能伝承—日本の中小メーカーにみる「型」と創造のダイナミズム—

第1部では、日本のものづくり基盤の衰退の背景に、子どもから企業にまで広がる「学び心・畏敬の念」の劣化、生活の「型くずれ」を指摘し、ものづくりの復活は、人々の絆をいかに取り戻すかというひとづくりに深く関わっているとす。

・第1章は、ものづくり現場の視点から、日本の伝統的な芸道に固有な「わざ」の伝承システムとしての「型」に技能継承との共通性を探る。それを起点として、近代化の出発期以来の、科学技術概念の日本的受容という歴史的構図をふまえて、日本の技術の今日的課題を明らかにする。

・第2章。国内では空洞化問題が深刻になっている。他方で、かつての日本の現場重視のものづくり文化は海外に移植され、独自の展開をみせている。その事例を韓国東国製鋼の積極経営に見出し、日本が韓国メーカーに学ぶべきは何かを考察する。

・第3章は、日本の伝統的なものづくり分野の3つの老舗（鋳物メーカー、甲冑師、西陣織）が、研鑽と工夫を重ね、最先端の技術や芸術にもチャレンジしつつ、現代を生き抜く姿を描く。

**第2部 ものづくりとまちづくり
—産業と地域の文化的創造—**

- 第4章 産業・地域の文化的創造とブルーリズム
- 第5章 陶磁器産業と地域の文化的再生—瀬戸ノベルティ・モデルにみる新たな視点—
- 第6章 伊万里・有田焼の産業振興とまちづくり—産業と地域、伝統と創造のダイナミズム

第7章 地方行政改革とまちづくり—第4次瑞浪市行政改革大綱づくりを通して—

第8章 瑞浪市の産業振興とまちづくり—やきものと地域、和と洋の創造的融合に向けて—

第2部。視点を足元の地域産業に移すと、そこでは、少子・高齢化、産業衰退、財政難、過疎化、大災害等々困難が山積している。調査を重ねるなかで、著者は、地域のものづくりの復活は、それを育ててきた地域の再生と結合することによってこそ活路を見出しうると確信する。

条件不利な第一次産業地域や斜陽傾向にある地場産地など、困難を抱えつつも、地域固有の伝統文化や資源を活かして、産業振興を地域づくりに結びつけている創造的な事例として、東九州の蒲江・北浦（漁業・観光）、西九州の伊万里・有田（陶磁器）、東海圏の瀬戸・瑞浪（陶磁器・農林業・行政）を踏査し、企業・行政・市民の三位一体視点から考察する。また、そこでの地域のコーディネーターに焦点をあてて、地域と人間の発達の関係についても考察する。

**第3部 「働・学・研」融合とひとづくり
—労働と人生の文化的創造—**

- 第9章 工場と人間発達—『資本論』にみる労働と学びの原点—
- 第10章 “働きつつ学ぶ”現場研究のダイナミズムと秘訣
- 第11章 「働・学・研」融合の経験知と新地平

終章 環境文化革命と人間発達

第3部は、ものづくりとまちづくりを、ひとづくり（学びによる人間発達）の視点から融合を図る。即ち、閉鎖的な工場空間内にある生産労働に対して、社会が積極的に関与し、学びへの回路を開いていくなかで、人間発達の諸条件と可能性を拡げていくことを歴史から学び、現代のそれを社会人大学（院）制度として提示する。同制度は、当事者を越えて、社会に学びの姿勢と文化を呼び起こすとともに、大学アカデミズムや経済学の革新に向け

た大きなインパクトになり、さらには、ポストフォーディズムの知識社会を支えていくものである。

・第9章、機械制大工業は革命的な経済効果をもたらした反面、人間と社会のバランスある発達を阻害するという両義性を確認したうえで、技術進歩と工場法による労働環境や教育制度等、工場への社会的規制とあいまって、協業を通して結合の力を学んだ人々が、集団的人格として立ち上がる条件—人間発達の条件が形成されるという「人間発達の経済学」の到達点を再確認する。

・第10章、第11章では、社会人大学院制度が普及するに伴い、社会人研究者の多様なモデルが生み出されていることを指摘し、その課題と潜在能力と魅力について紹介する。

・終章では、21世紀的課題に立ち向かうために、『資本論』の「人間の全面発達」論、農業と工業の「より高い総合」論の再検討をふまえ、「環境文化革命」とそれを担う人間像を考察する。さらに、技術進歩と人間発達など、これまでの考察をふまえて、価値論の視点から経済学のあり方に再考を促す。

3. 学び、型、技術、システムについて

論点は非常に多岐にわたるので、「型」、「技術」、「システム」を中心に所感を述べたい。その際、本書評の行論の必要上、この三点で著者が大きな影響を受けたと思われる関連研究の紹介をかねつつ、それらが本書にどう咀嚼されたかについて述べたい。

(1) 「型」論～生田久美子著『「わざ」から知る』からの学び

本書の「型」論を理解するには、『「わざ」から知る』²⁾との関係のみておく必要がある。生田氏の研究は、「形」の完璧な模倣を超えて「型」の習得に至るプロセスとしての「わざ」の継承から出発して、学習者の認知プロセスに光をあて、教育実践への応用を図る教育哲学論的論考である。ポランニーの「暗黙知」など、西欧の認識論との共通点と対比点も浮かび上がる。「学ぶ」とは何か、「知識

とは何かという根源的な問いを懐胎していたことから、認知科学、心理学、言語学、脳科学、環境、ロボティクスなど、今日も多様な分野で参照される好著である。

生田氏は、「形」と「型」の違いをモースの「ハビトス」の概念を用いて説明している。「型」は人間が生きる上での基本であり、しかもそれは単なる反復練習によって獲得されるものではなく、社会的、文化的な状況に影響される点を強調し、「形」は外面に表された「型」の可視的な形態ととらえている。

著者は、かかる技能継承の社会的、文化的装置としての「型」論を起点に、「技能」、「技術」、「科学」とは何か、その関係性はいかなるものかを問い、概念の再定義に迫ろうとする。そして、技術の、(技能と科学と対比しての)地位の確定—再評価、復権を論じたところに、日本「型」企業社会論から出発し、一貫して「型」の意味を問い続けた「十名型論」が完成した観がある。

(2) 技術論～木村英紀著『ものづくり敗戦』からの学び

本書の技術論とシステム論を理解するには、『ものづくり敗戦』³⁾との関係のみておく必要がある。木村氏は、制御理論研究者の立場から、日本人が人間中心的な「匠の技」など「暗黙知」を過度に重視する「労働集約型技術」を志向し、「形式知」を軽視してきた結果、「理論・システム・ソフトウェア」が最も弱い部分となっていると指摘する。そこから、日本の製造業の焦眉の課題は、この三点セットを強化発展させ、知の統合とコトづくりによって先端的なブレークスルー技術を開発していくことで世界に巻き返しを図っていく道を提示する。

また、西欧の技術を「資本集約型技術」とし、技術がコントロールする自然現象を対象とする科学(熱学、電磁気学、有機化学等)を「第2の科学革命」、人工物を対象とする科学(制御、OR、通信、計算等)を「第3の科学革命」とし、これらを推進したものとして<論理→理論→普遍性>を志向する科学的精神と、これに対応した<道具→機械→シ

ステム>という変化があったことを指摘する。

対して日本では、工学教育も含めて、自然科学と人工物科学の明確な識別がなく、普遍性や複雑性の視点は獲得されていず、「経験や勘の匠の技、要素技術、ハードウェア」に固執し、コト・価値づくりの発想にも乏しい「労働集約型技術」であると。そのため、「第3の科学革命」に乗り遅れ、国際技術開発競争の鍵である付加価値を生み出す要素が、既にハードからソフトウェアに移行しているにもかかわらず、対応できていないことに強烈な危機感を示している。

この指摘は、第1章の「2：科学・技術・産業の発展と人間の諸問題」のベースとなっている他、随所に影響がみられる。三つの「つくり」を知の統合によって全体システムとして構築するという本書の構想は、木村氏の提起を経済学において実現しようとする筆者の実験であるかの観がある。

4. 人材育成、技能の継承について

(1) 日本の基盤技術の現状

本書では、事例調査の豊富化に多大な努力が注がれている。しかし、より事例に普遍性をもたせるためにも、日本の人材育成、技能継承システム全体に関わる俯瞰的な問題点を抉り出してほしいとの思いも残る。例えば、本書でも鋳物メーカーの積極経営の事例が取り上げられているが、評者の方から、金型産業や鋳物産業の全般的な状況について若干、指摘したく思う。

即ち、日本では基盤技術を担う産業群が危機的状況にあり、その理由は、近隣諸国との競争、技術の高度化への対応、人材の確保・育成力の低下などである。なかでも、小規模の金型メーカーの状況は深刻で、量産拠点が高海外へと移転し、海外の安価な金型メーカーの攻勢のもとで、零細な金型メーカーが激減し、大規模なメーカーが増えている。

注目すべきは、金型技術自体の重要性は低下していないどころか、より重要性が高まっていて、大手企業ではコア技術となるような

高精度・高品質な金型と成形技術の内製化が進み、外部に発注する金型は高度な技術を要求しない、そのため、金型メーカーが精度や品質を追求しても、その技術の売り先がないという矛盾である。他方で、会社は廃業しても、大手から従業員（金型技術者）への求人殺到しているという。

以上の金型産業と同様の事態が、日本の多くのものづくりの現場でもおきている。2009年のリーマンショック以降に限っても、中小・零細規模の事業所が激減していることは、技術や技能の保全、継承する場そのものが消失していることを示すものであり、技能の継承や人材育成が企業内部の問題ではないことを示唆している。さらに、3Dプリンターの登場は、型業界に革命的なインパクトをもたらすであろう。

(2) 国際比較～金型産業と鋳物産業

上記は日本に特有の問題なのかどうか。金型産業は台湾と、鋳物メーカーはドイツの事例と比較を通して確認する。後者は、贅言は不要と思われるので、既刊の調査報告書⁴⁾を要約する。

・新興国～台湾企業鴻海の場合

話題の台湾企業、鴻海精密工業は金型を基礎にして発展してきた企業である。創業者郭台銘氏は、「金型は工業の母であり基礎である。生活関連の工業から情報産業、自動車産業、軍事工業まですべて金型と無縁ではない。」と述べている。金型が日本企業の競争力の源泉とみた氏は、日本から金型技術の専門家を招き、日本で学んだ中国人技術者を採用し、職人芸を吸収し、台湾から中国へと技能を伝えていった。約30か所の工場の大半に金型工場を併設している他、大規模な金型学校2ヶ所を有し、両校で毎年6000人が卒業し、各工場に派遣されるという⁵⁾。金型部門だけでトヨタの10倍以上の3万人の従業員を抱えていることになる。これほどの規模でなされると、それはもう国家規模での技術・技能の伝播というべきであろう。

この金型の技術力が基盤になればこそ、鴻海は受託生産特化のなかで技術力を蓄積し、

グローバル家電完成品メーカーとして雄飛するべく、2013年1月には自社製品：液晶TVを発表している。

・先進国～ドイツの鋳物工場の場合

「ドイツでは、職位(工場長、ライン長等)と職業資格(エンジニア、マイスター等)が密接な関係にあるとともに、デュアルシステムによって職業教育の一部が外部化されている。これに対し日本では、全体のチームワークを重視しつつ企業がそれぞれの方針で人材育成を行っており多能工が重視されている。(基本はOJT,現場重視,工程管理能力の重視)

ドイツではマイスターが技能と技術のブリッジ機能を果たすことで技能承継が行われる。日本では社長や技術者が現場に頻繁に足を運ぶことで、技能と技術の融合を図るとともに、暗黙知である技能の「見える化」、「標準化」を図ることで技能承継が行われている。また、ドイツではエンジニアが担当する冶金学をベースとした素材開発などのサイエンスを重視するが、日本では現場力を重視している。

ドイツでは鋳物メーカーと型メーカー、設備メーカーとの企業間関係が独立する傾向があるが、日本では摺り合わせ型の企業間関係が構築されている。日本では、鋳造の主要工程である砂型製作、溶解、鋳込みなどで、機械化や自動化などによって暗黙知の形式知化が進んでいる。他方で、重要度が高く、熟練技能を要する鋳造方案や模型製作については、上記の三種のメーカー間で密接な連携がみられる。

顧客ニーズへの対応については、顧客志向、顧客との長期的関係を大切にしている点、複雑形状対応、機械加工への進出などに取り組んでいる点では共通している。しかし、ドイツが、職能の専門・分化、企業間関係の独立性などによって得意分野へ特化するなど経営資源の選択と集中を図り、サイエンス主導のソリューション提供によって積極的に顧客数・取引業種を拡大している一方で、日本は全従業員が一体となり、顧客ニーズに幅広くこまめに対応する現場発のソリューションを展開している。」注；()内は評者の補足

である。

以上、日・独鋳物工場を比較すると、熟練技能の継承と人材育成を「企業に依存する内部市場」でまかなうか、「教育体制など社会制度に依存する外部市場」でまかなうかの、社会制度面での違いが際立つ。評者は、極めて合理的にみえるドイツの技能継承・人材育成システムに、むしろ、クラフト・ギルド、クラフト・ユニオニズムの伝統の強さをみるものである。

これに対して、日本の職人の、近代工業化に際しての歴史的な役割は多大であったにもかかわらず、その組織的自律性は極めて弱かったことを尾高煌之助氏が詳細に検討している。他方、小池和夫氏の近著のように、日本企業の高品質の源泉が、戦前から日本に発展していた「発言する職場」、即ち、「共働的団体交渉モデル」とする労使関係にあるとの主張もみられる。

これらの点は、資本主義の貫徹に対抗する歴史的、社会的対抗諸力のあり方に注目する著者の問題意識にもかかなうものと思われるので、技能継承・人材育成システムの「型」を、各国資本主義の「型」の国際比較の視点とあわせて深められるよう期待する。

5. 全体システムとしての評価

システムに問われるのは、(i)適用可能性(普遍性、汎用性、操作可能性)、(ii)(サブシステム等)の固有の論理や機能を把握したうえでそれらを統合させる目的、必然性、接続の論理の妥当性、(iii)＜駆動—伝達—制御—作動＞という、システムの推進力等～があげられよう。以上をふまえて、本書が全体システムとして機能しているかどうか、検討してみよう。

(1) 事例、分野のとりあげ方

第一の論点は、ものづくり分野—産業、業種、業態のあまりの多様性をいかにふまえるかである。ものづくりの定義を製造業に限ったとしても、＜伝統工業、地場産業、農村工

業、機械制大工業>、企業規模区分からは、<生業、自営・零細企業、中小企業、大企業>、地域と産業を一体化した産業集積地類型からは、<産地型、大都市型、企業城下町型、分工場型>等、大雑把に見ても多様な次元がある。最近では、GNT企業⁹⁾が高く評価されるなど、新たな視点も浮上している。

これらの観点から見れば、本書で取り上げられているのは<地方、観光、伝統工業、地場産業、生業、中小企業、産地型産業集積地>であり、モデルとしてはなお限定的といわざるをえない。(注：大工業大工場型産業として鉄鋼産業が取り上げられているが、別の観点から扱われている)

第二の論点は、まちづくり分野の多様性をいかにふまえるかである。本書もそうであるように、地域振興と直結する、いわば、「外需取り込み型産業まちづくり」が脚光を集めている。しかし、まちづくりの内的課題に応えることで拓けるものづくりやビジネスチャンス、いわば、「内需掘り起こし型産業まちづくり」もある。それには、ソフトとハードの代表である福祉と都市計画分野との連携が欠かせない。買物弱者支援、子育て支援、インフラビジネス、バリアフリー化、防災、コンパクトシティ化、再生・分散型エネルギー等々である。この視点も忘れてはならないと思う。

第三の論点は、ひとづくりの回路の多様性についてである。本書におけるひとづくりの回路は、社会人大学(院)生制度である。その意義の大きさについては繰り返さないが、その他にも、生涯学習や労働組合・NPOや市民団体主催の学習活動など、地域には多様な学びの「形」がある。強調したいのは、そこにおける社会人研究者の果たす役割が極めて重要なことである。

なお、全体システムは構想を示すだけでは限界があり、操作可能な段階にまでブレイクダウンされ、駆動力が与えられ、システム・マネジメントが伴わなければ稼働しないのではないか。そのためには、地域福祉論、都市計画論、自治体行財政論、自治体産業政策論等分野における住民協働の厚い蓄積を援用す

ることが有効であろう。本書でも、瀬戸市や瑞浪市の行財政分析が行われているが、地域の主体形成論の観点から、地域住民側の視点に立つものとしての公務労働論、NPO論等と結合して、三つのサブシステムの起動力、推進力を喚起してほしいし、本書の全体システムを担う一翼として、社会人研究者・院生・学生の方々の奮起が期待されることである。

また、三つの「つくり」の、さらに下位システムとして、「職場づくり」、「コミュニティづくり」、「民主的な学校・家庭づくり」という身近な「つくり」にダウンサイジングすることも必要ではないか。民主的な家庭のバックアップを抜きにして、社会人女性院生らの展望は拓かれない。今後さらに、男女にかかわらず、老親介護との両立が加わることを思えばなおさらである。

(2) 国際比較～EUの全体システム

全体システムについての国際比較がなされてもよいのではないだろうか。とくに、日本が成熟した市民社会から学ぶべきは何か。

三つの「つくり」の三位一体的な把握の上にたつ統合的な地域・都市再生戦略という点では、<地域経済・雇用>、<環境・文化・歴史・景観>、<都市・建築・交通計画>の「三兎を追う」EUの経験に一日の長がある。まちづくり分野では、コンパクトシティ論やシュリンクシティ論を理論的基礎とした都市構造システム改革の視点が、ものづくり分野では、EU中小企業憲章が明示する包括的かつ具体的な中小企業支援策、分権的地域産業政策の視点が、ひとづくり分野では、とくに若者、女性の能力を雇用に生かす視点が確立している。また、「つくり」に政策と専門家の果たす役割が極めて大きいとともに、NPO、協同組合や社会的企業など市民とコミュニティに基盤をもつ多様な事業主体との連携が定着している。

ちなみに、「〇〇づくり」という言葉は、その原初より「ある価値をめざして設計し、つくる」という概念を内包して出現してきた。また、その曖昧さゆえに多様な主体を包摂し、

連合させてきた。しかし、三つの分野あるいは分野内部においても、めざす価値・理念や手法やカルチャーが異なり、統合的な価値の共有、手段や手法の確立のために多くの時間と努力を要する。他方で、時代による価値観の変化や技術革新によって価値や手法は時代遅れになり、人々は分解されそうになる。であればこそ、三つの「つくり」は、政策や制度や計画として社会化される必要がある。強い経路依存性を考慮してもなお、EUモデルに学ぶべきものは多いように思う。

おわりに～著者への期待

最後に、今後の著者に期待する事項として、ひと・もの・まちづくりの融合システムを、地域外の諸力との相互作用のなかで考察を深められることを期待したい。

地域と産業は自立的でも自律的でもなく、「つくり」の主体の思惑も一枚岩でない。マーシャルの「集積・近接の利益」は、グローバル経済化、IT化、モジュール化の進展により低下しつつあり、さらに進路選択の違いにより、多くの産地や集積地は衰退、解体する兆しさもある。企業としての繁栄、産地としての繁栄、国家としての繁栄が、同時に達成できない時代になったのだ。また、足元の地域をみると、地場産業には<産地—商社—メーカー>間の複雑な力関係があり、工場制大工業には下請け垂直分業体制という力関係がある。

また、空間的にも地域は自己完結しない。本書の広域連携による観光まちづくりは、そのメリットを積極的に追求したものであるが、他方で、瀬戸市や瑞浪市が在る陶磁器産地の場合は、隣接するトヨタの企業城下町豊田市の影響を強く受ける立場になっている。

具体的に言えば、愛知県の多様な地場産業は、紡織機が自動車産業への先鞭をつけて以来、陶磁器産業におけるファインセラミックス、繊維産業における工業繊維製品、木工機械産業における工作機械等々、自動車産業と結びつくことによって活路を見出してきたという関係にある。しかし、愛知環状自動車道

路の開通によって、本書の舞台である陶磁器産地は西三河自動車産業集積地の拡大によって編入されつつあることで、地域の将来像が微妙に揺らいでいる。地元は、産地振興の努力と並行して、豊田市とのアクセスが格段に改善されたことをチャンスとし、自動車部品工場の誘致に全力をあげている。かつて「周辺」であった豊田市は「中心」に、かつての陶都は周辺化しつつあるとみることもできよう。それ以前にも、「綿織物は三州産地」と称された西尾市、「蚕都」の刈谷市、「日本のデンマーク」の安城市、「石都」の岡崎市など、かつて多様な伝統産業や地場産業で栄えた西三河の主要都市は、日本有数の自動車工業都市に変貌し、発展を遂げてきた。

このことを地元の人々はどうのように受け止めているのであろうか。評者が見る限り、地元はその繁栄を多としつつも、ものづくりがまちを画一化させ、「ものづくりはひとつづくり」が自動車大企業の現場重視の標語として浸透していることを是としている訳ではなく、NPOと自治体と事業者団体が協働して、地域の構造や問題点に照応した、多彩なものづくり、まちづくり、ひとつづくりの活動が取り組まれている。地域づくりは、地域をめぐる多様な条件と切り結ぶ形で行われるという地域の経路依存性を重視し、これまでと全く異なる地域モデルの発掘にも期待したい。

また大工業の現場も、BtoBの鉄鋼産業よりも、多品種少量生産を主流とし、より変化が激しいBtoCの自動車や家電など加工組み立て産業の方が、工場の今日的課題を鋭く提起しているように思われる。即ち、産業ロボットと人間がともに働く職場、ベルトコンベアを撤去し個人の一貫製造によるセル生産方式⁷⁾、非正規や外国人労働者比率の増大などがそれである。また、大工業における分業と協業は、ジャストインタイムによって下請け企業に生産・流通の同期化・同調化を強めている。

さらに、製造業からサービス産業への産業構造の変化は、雇用の劣化を伴いつつ、急速に進行している。本書のように、ものづくりにサービス産業も含める場合、コンピュータ

一による労働過程の変容を含めて、大工場の生産労働とは異なる形で、小売・飲食店労働、ケア労働、知識労働それぞれの形で人間が摩耗されていく実態と、そこからの変革もみていく必要がある。

以上のような、日本の地域とものづくりをめぐる多様で、具体的な諸課題にあわせて、本書をさらに豊かに発展させていかれるよう期待したい。

付言して、本書の内在的理解と本書の趣旨が社会的な広がりをもつことを願って、やや書評の域を越えた補足をさせていただきたく思う。即ち、本書が、恩師の「型」をめぐる著者の「守・破・離」のドラマでもあることについてである。

著者の恩師、池上惇先生は、人間の生と職場を貫く資本主義と工場制大工業が仕掛ける人間発達への抑圧力に対して、これを内破する実践知を追究し続けてこられた。経済学・経営学研究と現場研究との連帯による学の革新を提起し、そのインフラストラクチャーとして大学院の社会人入学および社会人大学院の制度化への道を、自ら民間事業として率先垂範、先導的に実現することで切り拓き、今なお奮闘中であることをご存じの読者も多いと思う。著者は、そうした恩師の理念を体現し、後継者へのモデル、「励ましの旗」ともいべき存在であり続けてきた点で、名実ともに社会人大学院生の「プロトタイプ」に他ならない。両制度の実現をみた今日、社会人院生はじめ学びを志す人々になされた多大な配慮への感謝の念とともに、師弟の社会的貢献の大きさを思わずにはいられない。

著者に続いて、様々なバックグラウンドをもつ様々な人々が、果敢に「働きつつ学び研究する」人生を創っている。その周辺には、それよりはるかに大勢の、職場や家庭や距離など諸事情のためにそれがかなえられない人々の厚い層がある。また、研究の成果をどのように、三つの「つくり」に生かしていくかが次の課題であることもわかった。

他方で、教育制度の只中では、小学生から大学生まで、「学び」の厳しさと喜びに向き合わない層が厚さをましている。グローバル

エリート人財の育成へと舵を切りつつある教育体制はこの層にどう対処していくのであろうか。近代化の指標に工業の社会化力をあげるとするならば、21世紀のものづくりのベースとなる知的社会を形成する社会化力を国家と国民がどのように獲得していけばよいのか、本書が提起したものは大きい。

また、本書は、「型」の考察を通して、人間にとって「ものをつくる」という行為の本源的意味を掘り起こした。本書をうけて、評者は、「わざ」は、心とモノとをつなぐインターフェイスであり、「型」は<2次元の図面>を<3次元の実物>(形)にかえる変換点と解している。

そのように極めて人間的くさい、即ち、人間の本性と結びつき、身体に埋め込まれ、苦しみと喜びを伴う「わざ」(熟練技能)。しかしながら、それは、身体的実践のルーティン化し反復した学習と経験の視点だけでは、ものと自然の御し難さの前には限界をもっている。そこで熟練技能を越えようとする技術と、技術では代替しえない人間とのせめぎあいが延々と続く。これら、日本の伝統的な技術・技能への尊敬と科学的精神とのバランスをとることが、今後の日本が真の技術立国となる上で重要になってくるものと思われる。

本書は、「ものづくり、まちづくり、ひとづくりの融合論、三位一体論」という新しい理論体系を示した。そして、21世紀の知識社会を支え、制御する実践知を、「働きつつ学び研究する」こと、さらに「社会人の学びを社会化・制度化する」ことを通して広めていくという「型」を師から継承し、独自に再構成し、経済学の体系として示した。これは、著者の人生から紡ぎだされた知見であり、確信でもある。本書からは、著者のこれからの研究者人生にかける決意とともに、年齢、職業、境遇を問わず、「ひるまず生きよ、たゆまず学べ、仲間とともに今を生きよ」、というメッセージが伝わってくるかのようである。

注

1)『人間発達の経済学』(経済学基礎理論研究所、

- 青木書店, 1982年)
- 2) 『「わざ」から知る』（東大出版会, 1987年）
 - 3) 『ものづくり敗戦—「匠の呪縛」が日本を衰退させる』（木村英紀, 日経新書, 2009年）
 - 4) 『日本の鋳物工場, ドイツの鋳物工場—ものづくり基盤の国際比較』（中小企業金融公庫総合研究所, 2007）
 - 5) 2012年12月31日, 2013年1月15日, 日本経済新聞朝刊を参照した.
 - 6) GNT企業（グローバル・ニッチトップ企業）

- とは, 特定のニッチな市場において国際的に高い市場占有率をもつ独立型企業を言い, その多くは中小企業よって占められている.
- 7) セル産業方式とは, 組み立て製造業において, 部品や工具をU字型（セル）に配置し, 基本的には1人が全工程を担当する生産方式. 多品種少量生産に柔軟に対応するとともに, 作業者の責任感や達成感を引き出すことでより効率性をあげることを目的とする.